

# 第2回研究集会企画のコンセプト

－東日本大震災学術調査『政治・政策』班

田川寛之（筑波大学） 2013年11月7日

# 報告の内容

---

- ▶ 1. 研究集会プラン
- ▶ 2. 研究集会コンセプト
- ▶ 3. 画期の例としての「戦後」
- ▶ 4. 災後を打ち出すことの意味
- ▶ 5. プログラムの骨格
- ▶ 6. 期待されるパネリスト

# 1. 研究集会プラン

---

## ▶ 日時

2014年2～3月を目途。

## ▶ 会議場所

筑波大学東京キャンパスを予定。

## ▶ 研究進展に向けた狙い

①研究分担者に向けた研究促進効果

②震災研究の国際的評価に関する着眼点の革新

\* シンポジウム形式とし、主に②を重視した「場」を提供

## 2. 研究集会コンセプト

---

### ▶ コンセプト

# 「東日本大震災は時代の画期たりうるか？」

## 海外から見る東日本大震災と日本政治」

### ▶ コンセプトの意図

震災に付随する事例研究の蓄積は重要。しかし、その総和が日本政治のあり方全体を述べる材料になるとは限らない。災害は、当代の社会状況を“スキャンニング”する外生的事象であり、外観が全面的であるために、社会全体が変化するように見えるのだが、ケース自体は局地的。

\* 局地から全体を語ることができるか？という疑問

### 3. 画期の例：「戦後」

---

- ▶ 日本人の大半が思いうかべる画期のイメージ:「戦後」  
「戦後」(イメージでも言説でもよいが)を構築したのはその時代を生きた人々。人々の構築行為そのものが、時代に内在的な行為であることを認識する必要あり。
- ▶ では、東日本大震災を契機として「災後」は成り立つ？  
我々が震災後に内在する存在である。けれども、それを自覚して社会を議論する立脚点(規範?)を有しているかと問われれば、非常に脆弱。

\* 阪神・淡路大震災の後に「災後」は語られていない。

## 4. 「災後」を打ち出すことの意味

---

- ▶ 事例積み上げ式の研究は不可欠(課題発見として)。
- ▶ 同時に、研究者の規範的立脚点を念頭においた、画期構築の試みが並列してよいのではないか。

ただし、このようなことのできる研究者は、若手・中堅世代では現実的ではないかもしれない。また、規範的とはいうものの、思想的・哲学的抽象を語ることは目的でない。

\* 国際的視点をあえて投入し、海外が日本政治、政治学に期待するものから、規範的立脚点を見出してはどうか。

→ シンポジウムにおいて議論を期待したい。

## 5. プログラムの骨格

---

### ▶ 第一部

基調報告(政治・政策班から)……………20分程度

### ▶ 第二部

パネリスト個人の視点言明……………10分程度

パネルディスカッション……………2時間

\* 前述の意味論につき、ビッグネームを中心に議論。

### ▶ 第三部

フロアとの対話……………1時間

\* 国際関係班、自治班、科学と政治班などと相互乗り入れした対話があってよいように思われる。

## 6. 期待されるパネリスト

---

- ▶ 海外の日本研究者
- ▶ 震災関連の既刊を有する海外の日本研究者
- ▶ 国内のいわゆる「ビッグネーム」
- ▶ 若手・中堅研究者
- ▶ 隣接班の中核研究者

\* 候補について提案を期待します。

\* 前回は飯尾教授(復興構想会議に従事)を招致したことから、政策当事者を招致する場合も「ビッグネーム」として、規範的立脚点を提供しうる人物、例えば畑村洋太郎氏(政府事故調委員長)のような人物が望ましい。



ご静聴ありがとうございました。

田川寛之（筑波大学）